

松 山 大 学 論 集  
第 22 卷 第 2 号 抜 刷  
2 0 1 0 年 6 月 発 行

## 帝国農会幹事 岡田温(19)

—— 帝農特別議員時代 ——

川 東 淨 弘

# 帝国農会幹事 岡田温(19)

—— 帝農特別議員時代 ——

川 東 埤 弘

## 目 次

はじめに

- 第1章 大正10年
- 第2章 大正11年 (以上, 第18巻第1号)
- 第3章 大正12年
- 第4章 大正13年 (以上, 第18巻第2号)
- 第5章 大正14年
- 第6章 大正15年 (以上, 第18巻第5号)
- 第7章 昭和2年
- 第8章 昭和3年 (以上, 第18巻第6号)
- 第9章 昭和4年 (以上, 第19巻第2号)
- 第10章 昭和5年 (以上, 第19巻第3号)
- 第11章 昭和6年 (以上, 第20巻第4号)
- 第12章 昭和7年 (以上, 第20巻第5号)
- 第13章 昭和8年 (以上, 第20巻第6号)
- 第14章 昭和9年 (以上, 第21巻第1号)
- 第15章 昭和10年 (以上, 第21巻第2号)
- 第16章 昭和11年 (以上, 第21巻第3号)
- 第17章 昭和12年 (以上, 本号)

## はじめに

前稿<sup>1)</sup>で、岡田温の帝国農会幹事時代（大正10年4月～昭和11年9月）の農政活動等を考察してきた。昭和11（1936）年9月15日、温は帝農幹事を退職し、後任に渡邊忠吾幹事長、東浦庄治幹事に託したが、同日帝国農会の特別議員に任命され、なお、東京にとどまり、帝国農会をサポートすることになった。本稿では帝農幹事退任後の昭和12年の温の活動について考察することとする。

## 第17章 昭和12年

昭和12（1937）年、温、66歳から67歳にかけての年である。

本年は政局不安定で、内閣が広田弘毅内閣、林銑十郎内閣、近衛文麿内閣とめまぐるしく変遷し、そして、近衛内閣下の7月7日、盧溝橋事件が勃発し、日中戦争が全面的に拡大して行き、日本は戦時体制に突入していった時代である。

さて、この戦時体制下、温は帝国農会の特別議員として帝国農会をサポートし、農政活動を行い、また、よく出張し、講演をおこなった。また、4月の総選挙では立候補の要請を受けたが、見送り、農会関係者の選挙応援活動をおこなった。さらに、本年、温の薫陶を受けた後輩たちの尽力によって、温の長年の「功績を記念」せんがために岡田温叢書（全3巻）が企画され、その編纂、加筆等に専念し、出版した。以下、見てみよう。

### 第1節 帝国農会関係等の活動

昭和12（1937）年、温は正月を故郷で迎えた。1日は石井小学校における

---

1) 拙稿「帝国農会幹事 岡田温(7)～(18)―帝国農会幹事時代①～⑫―」（『松山大学論集』第18巻第1号、2、5、6号、第19巻第2、3号、第20巻第4、5、6号、第21巻第1、2、3号、2006年4、6、12月、2007年2、6、8月、2008年10、12月、2009年2、4、6、8月）。

拝賀式に出席し、賀宴の際に、税制改革問題について説明をしている。2日は午前9時より午後3時まで石井校にて開催の石井青壮年講習会に出席し、来会の100余名に対し農業経営を中心に講義をおこなった。3日も同講習会に出席し、午前9時より午後3時40分まで、農家経営について講義した。4日は温泉郡農会、県農会等を訪問、挨拶し、昼は道後大和屋にて岡本馬太郎県農会長、県農会職員ら新年宴会を催した。

1月6日、温は佐賀県での講演（農道会、農会総代会）のため出張した。この日午前9時高浜発にしき丸に乗り、午後2時別府につき、湊屋に投宿し、翌7日、温は午後0時25分大分発にて佐賀県に向かい、6時30分佐賀市に着し、さらに唐津線に乗り換え、小城郡小城町に行き、田崎竹一佐賀県農会技師、飯盛小城郡農会技師らの出迎えを受け、金居屋に投宿した。8日、温は小城町の晴田本龍院（南禅寺派臨濟宗）にて開催の小城町農会主催の農道会員講習会（7～9日）に出席し、午前9時半から午後3時まで、農道会員60余名および農会関係者に対し、農業経営について講義をおこなった。翌9日も午前9時半より午後3時まで講義を行い、これにて講習会は終了し、後、講習生一同は仏前に読経をなし、終了式を挙行し、閉会した。その後、温は自動車にて藤津郡鹿島町に行き、宿泊した。10日、温は午前10時鹿島町中正閣（旧郡会議事堂）にて開催の藤津郡農会総代会に出席し、郡農会長の挨拶の後、温が午後3時まで、来会の170余名に対し、農会経営について講演をおこなった。終わって、自動車にて小城町に帰り、金居屋に投宿した。11日、温は午前10時小城町天山閣（旧郡会議事堂）にて開催の小城郡農会総代会に出席し、武富郡農会長の挨拶の後、温が午後3時半まで、総代158名、議員、技師ら50余名に対し、農業と農政について講演を行い、佐賀市松本屋に投宿した。なお、この日、温は東浦幹事に、2月1、2日ころ農会大会を計画するよう手紙を出している。12日、温は午前10時佐賀市教育会館にて開催の佐賀郡農会総代会に出席し、江副九郎郡農会長の挨拶のあと、温が午後2時40分まで、総代160余名、技師30余名に対し、農業と農政について講演をおこなった。この日も

松本屋に投宿した。13日、温は午前10時神崎郡神崎町公会堂にて開催の神崎郡農会総代会に出席し、野田宗郡農会長の挨拶の後、午後2時50分まで、講演をおこなった。14日、温は午前9時佐賀発にて三養基郡（みやきぐん）鳥栖町に行き、午前10時鳥栖町光明会館（仏教徒の修道所）にて開催の三養基郡農会総代会に出席し、郡農会長の挨拶の後、午後3時半まで、来会の160余名に対し、講演をおこなった。終わって、午後4時15分発の汽車にて杵島郡武雄町に行き、東京屋に投宿した。15日は旅館にて『帝国農会報』の原稿「農業国策」を書き上げ、航空郵便にて帝国農会に送付した。16日午前8時、佐賀県東松浦郡農会の野中技師の迎いで自動車にて佐志町に行き、午前10時青年倶楽部にて開催の東松浦郡農会総代会に出席し、主催者挨拶の後、温が午後3時まで、来会の130余名に対し、講演を行い、唐津に戻った。17日は唐津市公会堂にて開催の農会総代会に出席し、来会の150余名に対し、講演をおこなった。18日は午前8時15分東松浦発にて伊万里に行き、午前10時公会堂にて開催の西松浦郡農会総代会に出席し、諸石兵蔵郡農会長の挨拶の後、温が240余名に対し、農業経営、農政について講演を行い、終わって、田崎竹一県農会技師らと自動車にて武雄町に行き、東京屋に投宿した。19日は午前9時50分佐賀農学校（白石町）にて開催の杵島郡農会総代会（東部11町村）に出席し、山下馬雄郡農会長の挨拶の後、温が220余名に対し、講演をおこなった。終わって東京屋に投宿した。20日は午前10時東京屋の裏の公会堂にて開催の杵島郡農会総代会（西部12町村）に出席し、山下郡農会長の挨拶の後、温が230余名に対し、午後2時40分まで講演をおこなった。終わって、午後4時25分武雄発にて帰京の途につき、翌21日午後3時25分東京に着した。この日、麻生慶次郎先生より温に対し、日本大学農学部講師依頼の来信があったが、温は断りの返事を出している（その後、麻生教授から繰り返し要請があり、28日に講師を承諾している）。

1月21日、広田内閣下の第70議会在閣下で再開した。その1日目の衆議院本会議で政友会の浜田国松議員が軍部批判演説を行い、寺内寿一陸相との間でいわゆ

る「腹切り問答」に発展し、紛糾した。そして、陸相は強硬に議会解散を主張し、軍と政党との対立が激化した。そこで、広田首相は天皇の裁可を得て、22日、議会を2日間停会した<sup>2)</sup>。

そのような緊迫した中、帝国農会は1月22日、広田内閣に対し、農政上の懸案事項を要求すべく、道府県農会長協議会を開催した。温もこの会議に出席した。協議会は午前11時から始まり、各道府県農会長、農林省より田中農政課長ら、帝農より酒井会長、山田副会長、渡邊幹事長、東浦幹事らが出席し、まず酒井会長の挨拶の後、東浦幹事より農政運動の経過報告があり、直ちに声明、決議案の協議に入り、声明書及び決議を決定した。声明は広田内閣の国民（農家）負担の不均衡の是正を求める税制改革を支持し、その実現を要求するものであった。「国民負担不均衡ノ是正ノ大眼目トスル政府ノ税制改革案ハ達観シテ農会年来ノ主張ニ合致スルモノト認ム。然ルニ最近動モスレバ国民負担均衡ノ実現ヲ根本ヨリ破壊セントスルガ如キ反対論ノ頻リニ行ハル、ハ啻ニ農村ノ為ノミナラズ邦家ノ為深ク遺憾トスル所ニシテ吾等ハ斯ル反対論ヲ断乎トシテ排撃ス。茲ニ系統農会ハ一致団結シテ重要農林国策、農会技術員俸給国庫補助増額ト共ニ農山漁村民ノ過重負担ヲ軽減スベキ税制改革ノ実現ニ直往邁進セントス」。また、決議として、「一、政府ハ速ニ重要肥料業委員会ヲ開催シ、公正ナル肥料価格ヲ決定スベシ。一、政府ハ糸価安定施設ノ実施ニ当リテハ養蚕経営安定ニ付深甚ナル考慮ヲ払ヒ特ニ糸価安定委員会ハ養蚕農家ノ意思ヲ充分反映セシムル様構成スベシ」を挙げた<sup>3)</sup>。22日の温の日記に「出勤…。道府県農会長会…。昨日ハ農政委員会議会対策ノタメ道府県農会長会ヲ開キタルモ、昨開会第一日濱田氏演説ニ対スル寺内陸相ノ答弁ニ軍部ト政党ノ衝突トナリ、二日間ノ議会停止ヲナシ政情險悪トナリシガ、予定ノ如ク十一時開会。改メテ農会ノ意志表示ヲナシ、対議会運動方法ヲ決議シ散会ス。普通ナラバ午后ヨリ運動ニ着スル予定ナリシガ、政情急変ノタメ各情報ヲ探リ、明日午後二時

2) 升味準之輔『日本政党史論 第6巻』東京大学出版会、1980年、362頁。

3) 『帝国農会報』第27巻第2号、昭和12年2月、1～2頁。

開会トス」とある。

1月23日も帝農は午後2時から道府県農会長協議会を開いた。この日、政界はさらに緊迫し、政党と陸軍の対立のみならず、陸軍と海軍も対立し、広田内閣総辞職へと展開していった<sup>4)</sup>この日の日記に「出勤。午後二時ヨリ道府県農会長会ヲ開ク。昨夜海相永野大將軍政聞ノ疎通、政局打開ニ乗出サレシガ、妥協、解散、総辞職、何レノ見込ミモ立タザルヲ以テ、一切ヲ農政委員、総務員ニ一任シ、会長会ハ一先ヅ閉会トス。更ニ総務員会ヲ開キ、今後二十五日午前十時開会、対策ヲ講ズルコト〔、〕シ散会。午後八時頃号外ニテ、緊急閣議ニ於テ内閣総辞職ニ決定ヲ報ズ。政局愈混沌、国情多難」とある。日記中、総務員とは、緊迫した政局の中で、農政に関する情報収集並びに機宜の処置を講ずるために臨時的に設置したもので、帝国農政委員及び特別議員中より委員を選び、その中に温も入った<sup>5)</sup>

1月24日、宮中、政界は後継内閣問題で混雑の状況となったが、元陸相で穏健派の宇垣一成陸軍大将に組閣の大命が降下した。しかし、陸軍側が宇垣内閣に強硬に反対した。25日の日記に「陸軍部内強硬ニ宇垣内閣ニ反対ノ態度ノ由ニテ早くモ組閣困難ノ風聞アリ。但シ、宇垣大将ハ急ガズ騒ガズ悠々ト組閣計画ノ由」とある。26日、陸軍側の反対に対し世論は批判的であったようだ。この日の日記に「宇垣内閣組閣困難ノ空気濃厚トナル。陸軍ハ入閣拒絶ニ対スル声明書ヲ発表ス。新聞紙ハ批判ヲ差控ユル態度ナルモ軍部ニ対スル不満ノ空気ヲ窺ヒ知ル」とある。結局、宇垣は陸相が得られず、組閣を断念し、29日に大命を拝辞し、同時に陸軍大将も辞した。「宇垣大将組閣ノ道絶ヘ大命ヲ拝辞ス。同時ニ陸軍ノ政治団体化ノ責任感ニヨリ陸軍大将ヲ辞ス。政界是ヨリ多難」。その後、29日の深夜、大命は林銑十郎陸軍大将に降下した。30日、帝

4) 升味『前掲書』163頁。

5) 『帝国農会報』第27巻第3号、昭和12年3月、151頁。総務委員は、片野重脩、石黒大次郎、恒松於兔二、大島英二、山口忠五郎、伊野部重明、中村哲藏、小林嘉平治、鈴木憲太郎、小串清一、山脇延吉、高田耘平、山本莊一郎、木本主一郎、八田宗吉、岡田温、らであった。

国農会は急遽在京農政委員会を招集し、対策を協議したが、閣僚の顔ぶれがはっきりしないので、意思表示は見送った。

さて、林内閣の内閣組織化も陸相後任問題で難航した。石原莞爾ら満州組が板垣征四郎を陸相にしようとしたことに対し、寺内寿一ら陸軍3長官が反対した。林はやむなく、満州組と手を切って組閣し、2月2日に林内閣は漸く成立した。陸相に中村孝太郎陸軍中將が、農林大臣には山崎達之輔（衆議院議員、昭和会）<sup>6</sup>、蔵相には興銀の結城豊太郎が就任し、日銀総裁には三井の池田成彬が就任した。財界は広田内閣の馬場財政に修正を加えることを期待し、それが実現した。「軍財抱合」の第1歩であった<sup>7</sup>。

さて、2月も温は種々農政運動を行い、忙しかった。2日は午後1時より農林中金にて中央農林協議会を開き、文部省から堀池普通学務課長を招き、義務教育延長の説明を聞いた。しかし、「延長ノ理由ノ説明ハ吾々ヲ首肯セシムルニ至ラズ」であった。3日、林新内閣（蔵相は結城）は前・広田内閣（馬場財政）提出の予算、法律案の全部撤回を決めた。それに対し、5日、帝農は農政委員会を開き、山脇延吉（兵庫）、片野重脩（秋田）、石坂養平（埼玉）、中村哲蔵（茨城）、中田正輔（長崎）、小串清一（神奈川）ら出席の下、林新内閣に対する要望案を協議し、既定の方針により、首相官邸、大蔵、内務、農林官邸を訪問し、税制改革、農業政策、農会技術員への補助等を要望した。6日、温は東京高等農林学校に行き、午後1時半より3時40分まで、農学部の子生、教職員に対し、小農の本質について講演を行い、4時からの3年生の送別会に出席した。8日、帝国農会は農政総務委員会を開き、中村、石坂、小林、小串、山本、山口、山脇、伊野部、中田、鈴木、温ら出席の下、林新内閣による前内閣の農政改変の情勢対策協議を行い、後、3組に分かれ各政党に陳情を行い、温は山脇、山口、中村とともに政友会と社会大衆党を訪問、陳情した。政

6) 農相問題について、2月1日、石黒忠篤が林内閣の農林大臣に擬せられたが、石黒は「絶対謝絶」したと、温日記にある。

7) 升味『前掲書』247頁。



友会では鳩山一郎総務に面会したが、鳩山は農会側の提出問題には「全く関心ナキモノ、如ク」であった。9日も温は農政総務委員の小林嘉平治、山本壯一郎、伊野部重明とともに、大蔵、内務、陸軍省に行き、税制改革等を陳情し、その後、小林、山脇とともに山崎農林大臣に面会し、農会技術員への国庫補助等について陳情した。また、この日、大蔵省（結城蔵相）は省議により前・広田内閣の馬場案の地方財政調整交付金昭和12年度2億2,000万円を7,000万円に削減決定した。そこで、地方側、農会側が憤慨した<sup>8)</sup>。10日、温は南山館にて開催の全国町村会に出席し、地方税改革の逆戻しに反対の氣勢を挙げていたが、帝国農会より、農会技術員の俸給国庫補助増額危うしとの情報が入り、急遽帝農に帰り、山脇、中田、石坂とともに農林省の戸田農務局長を訪問し、情勢を聞き、さらに酒井帝農会長を訪問し、会長に最後の交渉を依頼した。11日午前10時、温は山脇、中田、石坂らとともに農林省を訪問、田中農政課長に面会した。その情報によると、大蔵省は150万円の査定であったが、農林省としては全額要求するとのことであった。12日、大蔵省は、農会技術員の国庫補助300万円を認めた。この日の日記に「町村農会技術者補助（団体活動助成費）三百万円（提案全部）大蔵省査定通過ノ報アリ。多年ノ要望漸ク目的ヲ発ス」とある。なお、この日、山脇延吉が陸軍軍務局長を訪問している記事がある。「山脇氏単独軍務局長ヲ訪問ス」。軍部への協力要請であった。13日、温は大島英二、中田、国光とともに、農林省、大蔵省を訪問し、農務局長、主税局長にお礼の挨拶をした。また、温の論文集の原稿の検討をした。14日は『帝国農会報』掲載の「農林国策」の原稿の執筆をした。

2月15日、帝国農会は午後1時から日本青年会館にて、農村多年の要望たる税制改革、重要農林国策および農会技術員給国庫補助増額実現促進を求める全国農会大会を開催した。全国から約3,000名の農会長が参集した。東浦幹事が開会を宣し、山田副会長が開会の挨拶を行い、また、議長となり、議事に入

---

8) 『帝国農会報』第27巻第3号、140頁、第27巻第5号、12頁。

り、宣言、決議、実行方法を議決し、ついで来賓並びに各農区の代表の演説がなされた。決議は、1、国民負担不均衡是正を根本目標とせる税制改革の実現、及地方財政調整交付金制度の確立を目指す、2、重要農林国策の実現を期す、3、農会技術員俸給国庫補助増額の実現を期す、であった<sup>9)</sup>。終わって、各県1名の代表が3隊に分かれ、政党本部、各省に陳情をおこなった。夜は午後6時より山王下幸楽にて農政研究会幹事会を開き、帝国農会の農政委員や温等も出席した。この日の日記に「午后一時農会大会開催。正味二千五、六百名参集。非常ノ盛況。愛媛県ヨリハ県會議員全部、郡農会長、町村長等五十六名出席。会長ハ浅野侯葬儀ノタメ山田副会長代理ス。来賓ノ演説終り、地方代表演説ニ入り、第二席神奈川県ノ古家氏ノ演説ヲ立会警官中止セシメ、会場活動ヲ呈シー時混乱ス。三時半盛況裡ニ大会ヲ終り、各県一名ノ(運動)委員別室ニテ打合ヲナシ、三隊ニ分レ政党本部関係各省ニ陳情。一般出席者ハ各自県選出代表ニ面接、要望ニ着手ス。夜、幸楽ニテ農政研究幹事会ヲ開キ、戸数割問題ニ付態度ヲ協議ス。十名ノ委員ヲ決定ス」とある。16日も大会決議実行運動委員(各県2名以上出席)が3班に分かれ、関係官庁を訪問した。温は第2班を率い大蔵省を訪問した。夜は午後5時より幸楽にて愛媛県出席者及び愛媛選出の衆議院議員の懇談会を催し、50余名が出席した。17日も運動委員が集合し、衆議院の予算委員を訪問、陳情した。18日午後6時から中央亭にて農政研究会総会を開催し、研究会員70名のほか、帝農関係者、上京せる全国農会大会実行委員40名が出席し、地方財政交付金問題について協議し、1、地方財政調整国庫交付金は昭和12年度に於いて徹底的増額の実現を期す、2、国民負担の均衡を図る為、速に国税及び地方税を通じ根本的是正の実現を期す、を決議し、13名の実行委員(東武、西村丹次郎、高田耘平ら)を選んだ<sup>10)</sup>。19日は農政研究会委員13名が交付金問題で打ち合わせを行い、総理等との会見の約束をとり、翌20日に13名の委員が総理、大蔵、内務、農林の4相

9) 『帝国農会報』第27巻第3号、昭和12年3月、151~154頁。

10) 同上書、153~154頁。

に面談した。21日、温は「農業国策の研究」の執筆等をした。22日は赤坂三会堂にて開催の全国町村長会に出席し、林内閣が前・広田内閣の方針（国民負担の均衡を図る税制改革及び地方交付金制度の実施）を放棄したことを批判する声明を発した<sup>11)</sup>。なお、この大会で民政党の清水徳太郎が交付金増額不可能、結城財政礼賛の弁護演説をおこなったため、参加者から大いなる不満が出た。終わって、帝農にて中央農林協議会幹事会を開き、地方交付金問題、農地法問題について協議した。23日、民政党の代議士会が開かれ、前日の清水発言が大問題となり、高橋守平、武知勇記などが反撃したと日記に記している。24日は千葉県香取郡農会主催の町村農会総代及び役員講習会のために小見川農学校に出張し、午後1時より3時40分まで、来会の300名ほどに対し、農会経営と現下の農政について講演をおこなった。25日、温は論文集の材料蒐集を行い、また、午後6時より鉄道協会にて中央農林協議会の主催の研究会にて農商務省の田中農政課長から農地法の説明を受けた。なお、この日、衆議院の予算委員会があり、交付金問題で結城蔵相が交付金増額絶対反対にあらざる旨の答弁があった。26日、農政総務委員会を招集し、片野、大島、中村、石坂、国光、小林、八田ら出席の下、交付金増額の曙光が見えたが、今後の運動のために3月3日に農政委員会、道府県農会長会を開催することを決めた。27日、温は論文集の選択を行い、また、この日の衆議院予算委員会で交付金増額の形勢となった旨聞いている。

3月も温は種々農政運動を行い、多忙であった。1日、温は午前9時上野発にて仙台に出張の途につき、午後5時仙台に着し、境屋旅館に投宿した。2日午前10時半から仙台市長町の宮城県農学校における宮城県畜産組合主催の有畜農業講習会に出席し、出席者150余名に対し、午後4時まで有畜農業経営について講義を行い、終わって、西沢県農会幹事らと林子平の墓や物産陳列場を参観し、慰労会の後、午後10時50分仙台発にて帰京の途につき、翌3日午前

---

11) 『帝国農会報』第27巻第3号、昭和12年3月、153頁。

6時40分上野に着した。

3月3日、帝農は衆議院における交付金問題の進捗に伴う対策及び4、5日開催の道府県農会長協議会の打ち合わせ等のために、午前10時半より帝農事務所にて農政委員会(第8回)を開き、国光、石坂、山下、山脇、中村、恒松、木本、伊野部、小串の委員が出席し、11時より院内両院協議会室にて開催の農政研究会実行委員会に臨み、実行委員に対し、一段の努力を要請し、午後1時半から農政委員会を再開し、明日からの道府県農会長協議会の協議事項を決定し、また、田中農政課長より農地法案の説明を受けた<sup>12)</sup>なお、交付金問題はこの日、政府と予算委員にて懇談会を開き、3,000万円の増額(1億円)と決定されている。農政運動の成果であった。

3月4日、帝国農会は午前10時より帝農事務所において道府県農会長協議会を開催した。酒井会長の挨拶の後、東浦幹事より交付金問題その他農政運動についての経過報告があり、また農林省農政課の藤原事務官より農地法案の説明があり、協議の結果、次のような決議を決定した。「決議 一、次期議会に於て国民負担の不均衡是正を根本目標とする税制改革の断行を期す。一、昭和十二年度に於ける地方財政調整交付金の徹底的増額の実現を期す。一、農地法案の実現を期す。一、国民健康保険案の実現を期す」<sup>13)</sup>そして、午後は2隊に分かれ、各政党に陳情した。温は民政党本部に行き、西村丹治郎、村上国吉代議士に面会し、税制改革の根本問題その他について陳情、要望した。5日午前10時より再び道府県農会長協議会を開き、午前は報告会、午後は5隊に分かれ、貴族院の予算委員を訪問、陳情した。そして、午後6時より丸の内中央亭にて、帝農主催の農政研究会幹事、道府県農会長懇談会を開催し、酒井会長の挨拶の後、農政研究会を代表して東武代議士が交付金問題解決までの運動経過の報告があり、交付金の増額が達成され、盛会であった。この日の日記に「道府県農会長会。午前報告。午後ハ五隊二分チ貴族院予算委員ノ私邸訪問。別ニ

12) 『帝国農会報』第27巻第4号、昭和12年4月、174頁。

13) 『帝国農会報』第27巻第4号、昭和12年4月、174頁。

山脇，恒松，中村，片野，大島諸君ノ一組ハ議會ニテ各派幹部ニ面会陳情。火曜会ハ徳川，岩倉，研究会ハ糸原，同成会矢吹省三，同和会佐々木八十八，交友内田重晟氏ニ面会陳情ス。午後六時ヨリ中央亭ニテ農政研究会幹事，道府農会長ノ懇親会ヲ開ク。農会技術員補助三百万円ト決定シ，交付金ハ三千万円増ノ一億円トシ，政党ノ威力モ發揮シ主客共ニ好気分ニテ東氏外数氏ノ演説等アリテ盛況裡ニ散会ス」とある。6日は山脇，恒松，片野らと衆議院の農地法案の委員を訪問，陳情した。8日も山脇，恒松，片野らと議会内での運動を行い，また，戸田農務局長と農地法についての打ち合わせをおこなった。ただ，温は「本案（注，農地法のこと）ノ空気不良，熱心ニ之ヲ支持スルモノナキニ困ル」と嘆いている。また，この日午後5時半より丸の内中央亭にて帝国農会は「農会回顧座談会」を催し，安藤広太郎，飯岡清雄，有働良夫，大島国三郎，高島一郎，月田藤三郎，福田美知，湯河元威，東浦庄治，青鹿四郎，温らが出席した<sup>14)</sup>。なお，この日より温は加藤龍雄に委嘱し，論文集の原稿の清書を始めた。9日は山脇，恒松，高島らと衆議院に行き，農地法案通過のために運動した。政友会は通過に傾きつつあったが，民政党が反対であった。この日の日記に「午後，山，恒，高島君ト議会訪問。農地法委員会室ニ入り，吉植，陣，西村三氏ヲ室外ニ呼出シ，情勢ヲ聴ク。政友会ハ通過ニ傾キタルモ，民政党ハ幹部所ガ審議未了ヲ希望スルラシ。政友会ニ於テモ助川氏ハ反対」とある。10日も衆議院に行き，国光五郎（政友），胎中楠右衛門（政友），西川貞一（第二控室）らと農地法案について懇談し，11日も衆議院に行き，民政党の松村謙三と農地法案について意見交換をしたが，民政党の農業通の西村，高田，松村，村上の4氏はいずれも反対の意思らしく，法案通過は見込み少なかった。12日も衆議院を訪問したが，農地法案通過はますます難しかった。「農地法案委員会，益空気悪シ」。なお，この日，温は論文集発刊に関し，弘道閣主及び同編集部との対馬忠行と協議した。13日，午前は論文集原稿の選択を行い，午

---

14) 『帝国農会報』第27巻第5号，昭和12年5月，174頁。

後は山脇延吉と衆議院に行き、農地法案の委員会を傍聴し、助川啓四郎代議士の質問を聞いた。助川は農地法案に反対であった。15日も衆議院に行き、委員会を傍聴した。民政党は農家負債整理案を同委員会に併託し、農地法案を握りつぶす考えであった。16日は論文集の『農業経営』の初稿に着手し、また、衆議院に行き、議会を傍聴したが、農地法案は審議未了となることがほぼ確定的とあり、またアルコール専売法案(酒精専売法案)も楽観をゆるさなかった。17日は午前10時より急遽「無水酒精原料協議会」を開き、実行委員の若林功(北海道)、矢野茂(熊本)らが議会運動をおこなった<sup>15)</sup>。18日は論文集の原稿を処理し、また、午後2時からステーションホテルにて中央農林協議会主催の国民健康保険法案について、内務省、農林省の係官より説明を受けた。19日は議会を傍聴し、アルコール専売、農地法案の委員会の状況を窺った。20、21日は論文集の『農業経営』の改稿。22日は午後6時より交友会幹事会を開催し、交友会館、大久保記念館建設の協議。23日は衆議院に行き、農地法案委員会を傍聴したが、相変わらず議事は進展しなかった。また、午後6時より幸楽にて農政研究会幹事会を開催し、東、高田、西村ら17名が出席し、アルコール専売法、中央卸売市場法改正について協議した。24～28日は論文集の『農業経営』の改定等をおこなった。29日、農地法案について、民政党修正に対し、政友会も林内閣も同意し、委員会を通過した。温は日記に「修正条項ハ悪カラザルモ時遅シ」と記している。30日、民政党の高田耘平が帝農に来会し、農地法に対する帝農の態度を聴かれた。帝農は原案に賛成で、修正案には未定と答え、温は個人としては修正案に賛成と述べている。

3月31日、林内閣は政府の重要法案の審議に既成政党がサボタージュし、けしからんとし、第70議会を解散した。もし、議会の延長があれば、重要法案(農村負債整理法案、国民健康法案、農地法案等)が貴族院でも通過が確実であった。なお、帝国農会の立場から高島一郎が『帝国農会報』に「第七十

---

15) 『帝国農会報』第27巻第4号、昭和12年4月、173頁。

議会と農政問題」と題し、振り返っている<sup>16)</sup>

4月、総選挙（第20回）が行われることになった。帝農は総選挙対策に取り組んだ。温は候補者に要請されたが、断り、帝農関係で立候補している関係者への応援活動に専念した。以下見てみよう。2日は千葉選出の吉植庄亮（政友）が再度立候補するので、温に応援の依頼があり、温は承諾した。3、4日は帝国農会発刊創刊新聞の原稿「代議士に感謝す」を執筆した。

4月5日より7日までの3日間、帝農は事務所にて道府県農会幹事主任技師協議会を開催した。農林省から戸田農務局長、田中農政課長らが臨席し、酒井会長の挨拶の後、東浦幹事が前年度事業の概要並びに本年度事業計画の報告を行い、ついで、協議事項「農会技術員志気振作及素質向上に関する件」等が協議された。協議会中の6日、郷里の仙波茂三郎<sup>17)</sup>が来会し、温に「昭和会」からの立候補を勧めた。この日の日記に「仙波茂三郎君来会。突然立候補ヲ勧めム。右ハ森隆孝氏ヲ介シ昭和会ノ窪井氏（山崎農相ノ参謀）ノ計画ニ投ゼシメントスルモノ、如シ。折柄協議会ニ出席セル眞木重作君トモ相談。午后森、仙波両君ト農相官邸ニテ窪井氏ト会見ス。自分ハ立候補ノ意志ナキモ郷里ノ知人ヨリ勧めラレツ、アリトノ話シヲナシ別ル」とある。7日、主任技師協議会が終わり、愛媛県農会から出席していた眞木重作（県農会技手）の帰国に際し、総選挙問題に注意を与えている。「眞木君今夕出発、帰国。選挙問題ニ付細心ノ注意ヲ与フ」。ここから、愛媛県農会の中から温に立候補の要請があったことが窺われる。8日、温は午前9時より午後2時まで、帝農の農業経営指導者養成講習会で小農の本質について講義をおこなった。

4月9日午前、帝農は農政委員会を開催した。片野重脩、大島英二、中村哲蔵、石坂養平、山本莊一郎、石黒大次郎、山口忠五郎、小林嘉平治、山脇延吉、恒松於兔二、伊野部重明、鈴木憲太郎の全員が出席し、総選挙に対する件

16) 『帝国農会報』第27巻第5号、昭和12年5月、7～26頁。

17) 温泉郡川上村松瀬川、早稲田卒、川上村会議員歴任。大正13年の総選挙で、温の事務局長を務めた。

を協議し、次のような声明を發した。「庶政は斷乎として一新すべく、農村の更生は一日も忽諸に付すべからず。兵農両全は時艱打開の要諦にて農村を輕視するところ善政を期すべきものなし。吾等は今や挺身を以て農会多年の主張たる国民負担の不均衡を根本的に是正する税制の大改革特に戸数割の全廢、徹底せる地方財政調整交付金制度並農村を興隆すべき積極的政策の実現を期す。右総選挙に当り声明す」。また、この日、温は午後、農会技術員問題で農林省、内務省に陳情を行い、また、午後2時より農業経営指導者養成講習会で前日の残りの講義をおこなった。

4月9日、温は愛媛県農会から暗号電報を受けている。「(○チリ○ハ) (Lチリ○ハイ)」。意味不明だが、温の立候補に関する賛否の情報のものである。10日、温は立候補問題で東浦幹事の意見を聞いた。また、農林大臣室にて昭和会の窪井義道代議士、山崎農相と会談し、立候補を勧められた。少し、心が動いているようである。この日の日記に「立候補ノ問題ニ付東浦君ノ意見ヲ聴ク。十二日更ニ相談スルコト、ス。農林大臣官ニテ窪井義道君、山崎農相三人ニテ会談。立候補ヲ勧誘セラル。考慮ヲ約シテ別ル。真木君ヨリ航空便ニテ多田君ト吉田村ニテ会談ノ状況通知アリ」とある。11日、温は昭和会からの立候補を勧誘している仙波茂三郎と再度協議した。「仙波茂三郎君ト会談」。12日、温は立候補問題について、東浦、内藤友明（元、帝農參事）と相談した。また、郷里から上京した岡本馬太郎（県農会長、県會議員、政友会）と立候補問題について協議した。そこで、温は立候補を見合せることにした。この日の日記に「立候補問題ニ付東浦及内藤両君ト相談。多田、眞木両君へ事情ヲ電問ス。今夜着岡本氏ト懇談セリトノ返電。夜、青木館ニ岡本君ヲ訪問シ、県ノ事情ヲ聴ク。同君ハ税制問題ノ際ノ言明ニヨリ自分ノ立候補ヲ止メ、前代議士三君選挙ノ方針ニテ政友会ヲ統制セリトノ計画ヲ聞き、カ、ル場合ニ立候補セバ各方面ニ悪影響ヲ及スヲ以テ立候補見合セト決心ス」とある。そして、翌13日に温は森隆孝氏に立候補見合わせを電話にて話し、また、農林大臣官邸にて窪井代議士に面会し、立候補しない理由を説明した。この日の日記に「電話ニ



テ森隆孝君へ立候補見合ヲ通ス。…農林大官邸ニテ窪井代議士ニ面会シ、立候補セザル理由ヲ話シ挨拶ヲナス。同君ハ大ニ援助スル予定由話シ、大臣ノ意志ヲ話サル」とある。

4月13日、帝国農会は帝農事務所にて、道府県農会長協議会を開催した。総選挙対策が議題であり、次のような主張、決議を決定し、総選挙に取り組むことにした。

「農会の主張—総選挙に臨んで—兵農両全は国家興隆の源泉にして、農村を軽視するところ国運の進展はない。今や時局重大、庶政は断乎として一新すべく、農村の更生は断じて忽かせにすべきでない。若しこの秋に及んで農村を軽視し、その対策を誤らんか、国家の前途之より危きはない。来るべき総選挙は国運の進展と農村の将来とをトすべき極めて重大なる選挙である。而して又、吾等多年の要望を実現すべき絶好の機会である。吾等は現下時局の重大性と農村の現情に鑑み、茲に徹底せる農村興隆の積極的諸政策の確立断行を要求するものである。主張 一、負担不均衡是正を根本目標とする税制の大改革、一、地方財政調整交付金制度の確立、一、自作農維持創設の徹底、一、小作関係の整調、一、農村負債整理事業の拡充強化、一、農業保険制度の確立、一、国民健康保険制度の確立、農林行政の整備刷新、以上の主張貫徹の為、吾等は飽く迄公正なる態度を以て総選挙に臨まんとするものである」<sup>18)</sup>

4月14日、帝国農会は総選挙で農会関係立候補者応援について渡邊幹事長、東浦幹事、高島幹事、温が協議し、大体、温と高島幹事が選挙応援活動にあたることを決めた。また、この日、神奈川県南部幹事より小申清一候補応援演説の依頼を受け、承諾している。15日、温は午前9時東京発のつばめにて静岡に行き、志太郡藤枝町公会堂にて開催の志太郡農会主催の講演会に出席し、午後1時より3時40分まで農政時事問題について、目前の選挙対策の意を含み、また、山口忠五郎議員(帝国農会農政委員、政友会)の応援の意をもつ

18) 『帝国農会報』第27巻第5号、昭和12年5月、177頁。

て講演をおこなった。終わって、午後4時20分発の急行にて帰京した。

4月16日、帝国農会は帝農関係立候補者の陣中訪問の日程と担当を決めた。温は神奈川の小串清一(神奈川県農会長, 政友), 奈良の福井甚三(政友), 岡山の西村丹治郎(民政), 広島土屋寛(民政), 永山忠則(昭和会), 山口の国光五郎(山口県農会長, 政友), 西川貞一(政友), 福岡の石井徳久次(福岡県農会長, 政友)の応援を担当することになった。なお高島幹事は北海道, 東北方面を, 間部がその他の地方を担当した。17日, 温は大阪から立候補している社会大衆党の杉山元治郎に運動資金3円を送付している。18日, 温は神奈川から立候補の小串清一候補の応援演説に行き, 午後5時2分戸塚に着き, 7時40分より三浦郡小坪小学校にて50余名に対し, 小串候補の応援演説を行い, ついで逗子小学校に行き, 120余名に対し, 40分ほど演説した。当地方は漁村にて応援演説やりにくかったと日記に記している。終わって, 熱海に行き, 青木館に投宿した。19日は午前10時13分熱海を出て, 名古屋で関西線に乗り換え, 奈良に行き, 午後6時21分奈良に着し, 江木, 秋山奈良県農会技師に迎えられ, 山辺郡都賀野村善導に行き, 70余名に対し, 福井甚三候補のために応援演説を行い, ついで深川小学校に行き, 60余名に対し, 福井候補の応援演説を行い, 宿に帰ったのは午前1時半であった。20日は午前6時18分奈良を発し, 桜井町から自動車にて宇陀郡松山町の松尾四郎候補(民政党)宅を訪問, 激励し, 後, 大阪に出て, 午前10時40分つばめにて岡山に向かい, 午後1時44分岡山に着し, 塩見県農会幹事に迎えられ, 高梁町の西村丹治郎(民政)選挙事務所を訪問し, 宮窪郡常盤村に行き, 同公会堂にて100余名に対し, 応援演説を行い, 11時前倉敷に行き, 駅前角屋に投宿した。21日は12時半に倉敷を出て, 尾道に下車, 土屋寛(民政)事務所に行き, 打ち合わせ, 甲山町小学校に行き, 60余名に対し, 土屋候補の応援演説をおこなった。22日は午前8時乗合自動車にて比婆郡庄原町に行き, 永山忠則候補(昭和会)の選挙事務所を訪問, 挨拶をし, 広島に行き, 荒川五郎(民政)の選挙事務所を訪問し, 午後5時広島を発し, 山口県徳山市に下車し, 都濃郡長

穂村の演説会場に行き、国光五郎候補（政友）のために、40余名に対し国光候補の応援演説を行い、国光宅に宿泊した。23日は午前10時出て、佐波郡出雲村に行き、午後1時より雲相寺での演説会で国光候補のために、70余名に対し、応援演説を行い、午後7時より同郡右田村小学校に行き、70余名に対し、応援演説を行い、三田尻駅前の旭旅館に投宿した。24日は午前7時50分三田尻を出て下関に行き、西川貞一（政友）選挙事務所を訪問、激励の挨拶を行い、ついで、門司に行き、福岡県農会の広吉政雄と打ち合わせし、ともに直方町の石井徳久次（福岡県農会長、政友）の選挙事務所を訪問、激励し、後、内野村小学校に行き、40余名に対し、石井候補の選挙応援をした。終わって、直方町に帰り、新油屋旅館に投宿した。25日、温は愛媛県に帰郷の途につき、若松港から木浦丸にて高浜に向かい、翌26日午前9時高浜に着した。

4月26日、温は第1区の松田喜三郎候補（民政）、武知勇記候補（民政）の選挙事務所、及び大本貞太郎候補（政友）を訪問した。1区は定員3で無風選挙であった。27日、温は午前11時松山発にて第2区から出ている親戚の小野寅吉候補（民政）応援のため2区に入った。2区は定員3で、民政党が現職の小野寅吉と新人の村瀬武男の2人を立て、政友会も現職の河上哲太と元職の森昇三郎の2人を立てていた。さらに社会大衆党から林田哲雄、東方会から渡辺鬼子松、無所属から拝田正寿、竹田安治らが立候補し、乱戦であった。温は松田喜三郎、宇和川浜蔵（県会議員、民政）、堀本宣実（同）らと小野寅吉の別働隊を組織し、宇摩郡に行き、まず三島公会堂にて600余名に対し、約50分間演説し、ついで急ぎ、土居劇場に駆けつけ、350余名に対し、農村問題を話し、小野候補の応援演説を行い、新居浜の小野基道宅（娘婿）に戻り、宿泊した。28日は午後7時半より新居浜町小学校にて600余名に対し、ついで神郷村公会堂にて140余名に対し、ついで角野村の劇場にて250余名に対し、小野候補の応援演説を行い、11時過ぎ小野宅に帰った。29日は西条の黒住教会に行き、30余名に対し、次に氷見村の劇場にて300余名に対し、約1時間応援演説を行い、小野宅に戻り宿泊した。30日は衆議院選挙の投票日で、温は午

後1時40分新居浜発にて人力車にて松山に帰った。

愛媛選挙区の開票結果は、第1区は民政党的の松田、武知、政友会の大本が無投票当選し、第2区では政友会の河上、民政党的の小野、村瀬が当選し、第3区では政友会の砂田重政、高島亀太郎、民政党的の村上紋四郎が当選した。温が特に応援した小野寅吉は2位の当選であった。県下の勢力は民政党的5、政友会4で、前回と変わらず、高島亀太郎を除き、再選であった<sup>19)</sup>。

5月、温は愛媛の自宅でややゆっくりし、論文集の原稿の執筆や種々所用をなした。1日は慎吾の結婚問題で、仲介の永沢勝衛(唐人町仁寿生命)を訪れ、相手方の福岡亀一夫妻と懇談した(後述)。2日は『農業経営』の「小農の本質」の執筆をした。3日は県庁に知事を訪問、後、県農会を訪問、そして、来会の井上要松山市長と梅の家にて囲碁をした。4日は「小農の本質」の執筆等をした。5日は土居勤皇祭にて、親族の高木夫妻、綾子母子等来客し、6日も親族の岡井が来宅し、養嗣子問題を相談し、また、南土居部落の自作農創設問題の確執(小作地取り上げ)で心痛している新宅の岡田英雄と協議した。7日は永木亀喜、永木京次郎、勝田六郎、日野道得及び岡田英雄を招き、小作地取り上げ(永木亀喜4町、京次郎2町、勝田1町分)について、自分に預け、延期するよう勧告した。9日は「農業経営究局の目的」を執筆、10日は「農業経営の成果」を草了した。11日は曾祖母(積善院)の66回忌を営んだ。12日は「農業経営簿記」を草了、14、15日は「農業経営究局の目的」を草し、17日は『帝国農会報』の原稿「農地政策の理想検討」を草し、午後は森松座に芝居見物、18日も「農地政策の理想検討」を草し、19日は森松座に妻・イワと芝居見物した。20日、慎吾が愛媛県農会赴任のため帰国し、温は高浜に迎へに行った。そして、21日、慎吾は県農会に出勤始めた。なお、この日、慎吾の結婚問題で仲介している永沢勝衛が来宅し、相手先の福岡亀一家訪問の結果を聞いている。翌22日、温は慎吾と永沢宅を訪問し、慎吾を紹介した。23日

---

19) 『愛媛県議会史 第四巻』1299～1302頁。

は自宅の本箱，書類の整理，24日は農業経営の「小農の本質」の再読，手入れなどした。

5月25日，温は午後7時高浜発すみれ丸にて，上京の途につき，翌26日午前6時40分神戸につき，三宮午前7時25分のさくらに乗り，午後4時40分東京に着き，帰宅した。なお，この日，帝国農会農政委員会があり，総選挙後の林内閣に対する対策について協議し（温は出席していない），税制の根本的改革，地方財政調整交付金の配分，農業保険制度の確立に関し，特別調査会を設置し農村側代表を参加せしめよと決議している<sup>20</sup>。27日，帝農に出勤し，石橋幸雄から温の論文集発行計画の報告を受けている。28日は論文集の『農業経営』の第1章，2章の手入れを終わり，第3章に着手。29，30日も終日原稿手入れをした。31日は石橋と叢書（論文集）の出版の打ち合わせを行い，また帝都日々新聞主催の大相撲を国技館にて清香，禎子と観戦した。なお，この日，漸く林内閣が総辞職した。「国技館ニテ林内閣総辞職ノ報ヲ五時過ぎ伝ヘラス。百七十日ノ短命内閣ナリシ」とある。

林内閣が総辞職すると，元老の西園寺公望は次期首相として，当時各方面から期待されていた公爵・貴族院議長の近衛文麿を推挙し，6月4日，近衛内閣が成立した（第1次）。農林大臣には有馬頼寧（貴族院議員）が就任した。

6月，温は叢書の原稿の執筆，校正等をおこなった。1日は帝農に出勤し，『農業経営』の原稿整理，また石橋，弘道閣と叢書刊行の打ち合わせ，2日は『農業経営』の第1～3章の原稿を育生社弘道閣の対馬忠行に渡した。3日は旧稿の「稲作改良及麦稈真田」の論文の手入れを行い，4日に叢書の『農業経営』の第1編「農業経営通論」の10章までの全原稿を対馬忠行に渡した。なお，この日に近衛内閣が成立した。評判は良かった。この日の日記に「近衛内閣々員全部揃ヒ親任式アリ。外相広田，内相馬場，陸海軍留任ニテ相当確カラシ。賀屋大蔵，吉野商工，安井文部及風見内閣書記官長，若手等ニテ且両政党

---

20) 『帝国農会報』第27巻第7号，昭和12年7月，165頁。

代表ヲ入レ等、大体ニ於テ評判好シ」とある。5日は帝国農会農政委員会を開催し、山田副会長、山脇、恒松、伊野部、木本、山本、山口、石黒、中村らが出席し、近衛新内閣対策について協議し、次のような新内閣に期待する声明書を発表した。「最近物価の騰勢に因り農家の窮乏更に深刻を加へ農村の危機正に至る。歴代内閣均しく庶政一新の政綱を掲ぐるも然も農村匡救の実挙らざるは吾人の深く遺憾とするとところなり。政局今や革まる。批政は断乎として芟除すべし。茲に系統農会は協心戮力以て年来の主張たる国民負担の不均衡是正を大眼目とする税制の抜本的改革、地方財政調整交付金制度の確立、農地制度、農家負債、農業保険等の諸政策及物価騰貴に対する諸政策の実現並に農林行政機構、農業団体の革新整備を期す。新内閣の成立に方り敢て要望す」<sup>21)</sup> 後、有馬農林大臣等に挨拶に行った。7日は山脇延吉から梅津陸軍次官その他との折衝の報告を聞いている。8日に叢書の『農業経営』の原稿を対馬忠行に渡した。10日は産業組合中央金庫に行き、石黒忠篤理事長に挨拶し、内藤友明の中金への就職の件等、12日は叢書の第2巻の『農業政策』の原稿蒐集、手入れ等、13日は叢書第1巻の『農業経営』の初稿の校正等、15日も同校正、16日は同日次の検討等、17日は同校正と第2巻の編纂等、18日は叢書に入れる『帝国農会報』の温の論文の採否の検討等、19日は『農業経営』の校正等をおこなった。20日は藤巻、飯岡が来宅し、東京高等農林学校大久保記念館建設の寄付について懇談した。但し、幹部は200円の寄附で、温は「寄付ノ多キニ閉口」している。21日は右腕に痛みを感じ、三崎町栗原医院に行き、神経痛の注射をおこなった。22日は叢書の編集等、23日は『農業経営』の校正等、24日は叢書第2巻の『農業政策』の原稿整理等、25日は同「農業国策の研究」の加筆等、26日は『農業経営』の校正、「農業国策の研究」の加筆等、28日も「農業国策の研究」の加筆等、29日は第1巻の校正を行い、育生社に送った。

7月も温は叢書の校正や原稿執筆等に従事した。また、本月、盧溝橋事件が

---

21) 『帝国農会報』第27巻第7号、昭和12年7月、166頁。

勃発し、日中全面戦争に発展し、その記事がしばしば記されている。1日は叢書の第2巻の『農業政策』の原稿整理等、2日は第1巻の校正を行い、同序文を草し、育生社に送った。3日は第1巻所収の「農業はどう経営すべきか」の校正を終え、育生社に送付し、また、第2巻の原稿を整理し、ほぼまとめた。4日は叢書の第3巻『農村時論』におさめる「系統農会のイデオロギー」の起草を開始した。5日は第2巻の原稿整理を終了した。6日は「系統農会のイデオロギー」の執筆、7日も同原稿を執筆した。

さて、7月7日の夜、盧溝橋事件が勃発した。この日の温の日記に「盧溝橋ニテ支那兵、日本軍隊演習ヲ射撃ス。日支事件コ、ニ端ヲ発ス」と記している。日中全面戦争の始まりであった。8日午前、盧溝橋での日中両軍の全面衝突となった。翌9日の温の日記に「日支軍龍王廟ニテ衝突、戦闘ス」とある。なお、現地では8日に停戦に向けた交渉が始まり、翌9日午前一応停戦が成立した。

7月8日、温は第1巻の表紙の『農業経営』を毛筆で自著し、育生社に送り、また、叢書第3巻の編集を開始した。9日は午後6時より一橋学会館にて開催の農業経済学会の懇談会に出席し、有馬新農相、石黒中金理事長らと農政問題について意見の交換をした。10日は第1巻の3編までの再校、また、3校を行い、11日も校正を行い、育生社に送付した。12日は自序の校正を行い、これで第1巻の校正が総て終了し、この日の午後、温は囲碁クラブにて遊んでいる。

なお、盧溝橋事件は7月11日午後8時に現地の両軍の間で、責任者の処分、中国軍の盧溝橋城郭・龍王廟からの撤退、抗日団体の取り締まりなど日本側の主張を入れた現地停戦協定が成立した。しかし、同じ日、近衛内閣は午後閣議で、内地3個師団の華北派兵、さらに、関東軍、朝鮮軍の華北派兵を決定した。また、近衛内閣はこの事件を「北支事変」と呼ぶと発表し、事変という名の戦争に拡大する方針を示した<sup>22)</sup>

---

22) 秦郁彦『日中戦争史』原書房、昭和36年、186～204頁。藤原彰『日本軍史 上巻戦前編』社会思想社、2006年、290～292頁。

7月13日、帝国農会は農政委員会を開催し、来る特別議会对策について協議し、重政農政課長の出席を求め、地方財政調整交付金の説明を求め対策を研究し、また、「北支事変」に対し、次の如く、近衛内閣を断乎支持し、挙国一致・兵農両全を求めた。「東亜の時局正に重大ならんとす。寔に挙国一致外患に対処すべき秋なり。吾人は茲に政府の断乎たる措置に全副の信を置き、一致協力国難の克服に邁進せんことを期す。政府は強兵の母胎にして兵糧の倉稟たる農村に対し適正なる国策を実施し、兵農両全、富国強兵の実を挙げ、以て国運の恢弘に努められんことを望む。敢テ声明す」<sup>23)</sup> また、午後6時から山本楼にて農政委員と高田、西村、村上、福井代議士を招き、晩餐会を催した。14～18日は農会使命再検討の執筆を行い、また、第3巻の原稿整理、編集をおこなった。19日、農会改造論その他を検討した。また、この日、第1巻の『農業経営論』の見本が出来上がり、20日に第1巻が刊行された。また、この日、温は第2巻『農業政策』の全原稿を石橋幸雄に渡した。

なお、「北支事変」は、7月19、20日悪化した。翌20日の温日記にその記事がある。「北支問題解決ニ進展セズ。本日砲撃ヲ開始スト」。しかし、温はまだ日中戦争に興奮してはいなかったようだ。21日の日記に「今朝ノ新聞ハ戦闘行為ニ進ミ和平ニ遠ザカリツ、ア如ク見ラル。但シ、吾々ノ心情ハ戦争ノ必要ヲ感ズルマデノ亢奮ニ至ラズ」とある。21日に「北支事変」の悪化はやや緩和した。23日の日記に「今朝ノ新聞ハ一切ニ北支事変解決、支那軍撤兵、南京政府現地協定承認ヲ報ズ」との記事がある。

7月23日、近衛内閣下の第71特別議会在が召集され、25日に開会した。それに対応して、帝国農会は25、26日の両日、帝農事務所にて道府県農会長協議会を開催し、特別議会对策を協議した。協議会では陸軍新聞班係の馬淵少佐より北支事件に関し詳細な説明を受けた。また、農家負担の軽減については決議したが、国民健康保険案については意見が対立し、決定しなかった。また、

---

23) 渡邊忠吾「帝国農会の事変対策」(『帝国農会報』第28巻第5号、昭和13年5月)



協議会では「北支事変」に対し、近衛内閣の態度を断固支持する態度を表明し、さきの農政委員会の声明とほぼ同様の挙国一致・兵農両全の声明を決定した。「東亜ノ時局ハ重大ニシテ寔ニ挙国一致外患ニ対処スヘキ秋ナリ。吾人ハ茲ニ政府ノ断乎タル措置ヲ信頼シ、一致協力国難ノ克服ニ邁進センコトヲ期ス。農村ハ強兵ノ母胎ニシテ兵糧ノ倉稟タリ。政府ハ宜シク税制改革、農地制度ノ確立、農業保険制度ノ確立、農村労働力ノ調整、農業生産力拡充等ニ関シ適正ナル国策ヲ実施シテ兵農両全ヲ期シ真ニ国運ノ恢弘ニ努メラレンコトヲ望ム」。そして、決議として、「税制改革ノ期ニ際シ、系統農会ハ国民負担不均衡是正ノ為、左記事項ヲ包摂スル根本的税制改革ノ促進ヲ期ス」とし、一、地租を100分の3に引き下げ、二、家屋税を国税に移管し、100分の3程度にすること、三、戸数割を廃止すること、等を掲げた<sup>24)</sup> 午後6時から中央亭にて農政研究会総会を開いた。70余名が出席し、空前の盛況であった。26日も道府県農会長協議会を開き、運動方法を決議し、農政総務委員をおき、閉会した。

7月25、26日、「北支事変」は事態が悪化した。25日に北平、天津中間の郎坊で、26日北平城門の1つの広安門で日中両軍が衝突した。27日、近衛内閣は「北支事変」に対し、内地3個師団の派兵を承認、武力行動をとることを決めた<sup>25)</sup> 27日の温の日記に「北支事件風雲急」「武知君ノ談ニヨレバ、今朝二時北支事件ハ武力解決ヲ決心せる由」とある。そして、28日に日本軍は華北で総攻撃を始めた。この日の日記に「北支戦争益拡大ス」とある。

7月27日、温は議会運動のために、渡邊幹事長、山脇延吉とともに議会に行き、民政党の武知勇記、西村丹治郎、政友会の東武、福井甚三議員に面会し、税制改革に関する建議案、度量衡法改正建議案等の協議をした。29日は衆議院にて農政研究会の新幹事の顔合わせ会を開き、幹事が36名、帝農側は渡邊幹事長、山脇延吉、片野、温が出席し、税制根本改革案を次の通常議会に提出することを協議し、後、帝農にてその建議案を温らが作成した。30日は

24) 『帝国農会史稿 資料編』1137～1139頁。

25) 秦都彦『日中戦争史』220～222頁。

土地政策私見の執筆等、31日は午前は土地政策大綱の執筆を行い、午後は渡邊幹事長、尾崎とともに議会に行き、税制改革建議案について、西村、高田、東、福井4氏、並びに各派の幹旋者（北勝太郎、杉山元治郎、三浦虎雄、今井新造）と会合し、一案にまとめ、高田議員に渡した。

8月、温は専ら原稿の執筆や叢書第2巻の校正、第3巻の編集等に従事した。1日は土地政策大綱の執筆、2日は小作立法編の起稿、3日土地政策の草了、4日は衆議院に行き、税制改革建議案の取り扱い状況をうかがった。5日は農村更生基本調査の起稿、また、叢書第2巻『農業政策』の第1編「農業政策一般」の校正を開始、6日は衆議院に行き、税制改革建議案の取り扱い状況を聞き、明日提出することを聞いた。7～9日は農村更生基本調査の執筆等、10～12日は第2巻の校正等を行い、また、12～13日は四阪島煙害調査未の原稿を執筆、15日は第2巻の校正、叢書第3巻の原稿整理等をおこなった。

8月13日、上海で、海軍の陸戦隊と中国軍の交戦が始まり、「北支事変」は上海に飛び火、拡大した。翌14日の温日記に「北支事件愈重。上海ニ於テハ中央軍ト戦端ヲ開クニ至リ、昨日及本日臨時閣議ヲ開キ、最後の決心ヲ要スル対処法ヲ決定スル由」とある。そして、15日、近衛内閣は南京政府断固膺懲声明を出し、南京の空爆を始めた。ここに「北支事変」は日中全面戦争へ展開していった。この日の日記に「空軍大活動、南京ヲ襲撃ス。…敵機二十余台撃破ストノ号外アリ。如何ニヤ」とある。16日の日記「空軍大活動、二日間ニ格納庫十七、航空機六十台ヲ破撃ス」、17日の日記「海軍広報的報道ニヨレバ、十四、五、六ノ三日間ニ百台以上ノ飛行機ヲ撃破セシ由」とある。

8月18日、温は第2巻の校正を行い、また、第3巻の原稿全部を石橋幸雄に渡した。この日、郷里の慎吾から日中戦争に伴う南土居部落青年の召集、農家にとっての悲劇の状況の来信が来ている。「慎吾ヨリノ来信ニヨレバ、十五日七十名動員サレ、計九十名召集サルト。南土居ノ池田盛昌君モ出征ノ由。三十七歳ノ家ノ柱石ノ出征ハ最大ノ悲劇ト付記セルガ、正ニ其通り」。19、20日

は第2巻の校正等を行い、21日は愛媛への帰郷の荷造り等をした。しかし、温は前日より下痢を起し、体調不良となり、22日の帰郷を延期した。22、23日は体調不良だが、農会史資料の蒐集等をした。24日は第2巻の『農業政策』の自著をし、育生社に送った。25、26日は第2巻の校正をし、育生社に送付した。

8月26日、温は午後9時東京発にて愛媛に帰国の途についた。東京駅は日中戦争出征者見送りのために混雑していた。翌27日、愛媛県に入り、新居浜で小野基道、西条で娘の綾子と孫の仁美に会い、帰宅したが、愛媛でも出征兵士の見送り風景が見られた。日記に「沿道各駅出征見送りニテ雑聞ス。…愛媛ニ入り、川ノ江駅ヨリ国防婦人団ガ出征兵士（車中ノ）ニ湯、茶、氷、菓子等ヲ饗ス。新居浜駅ニテ小野ニ面会…出征者見送り。西条駅ニテ綾子母子ニ面会、仁美ハ頑健。土産物ハ新居浜ニテ基道ニ托ス。松山駅ニテ安生君ニ会シ、自動車万端ノ斡旋ヲシテ貰フ。七時前帰宅ス。老母其他無事、慎吾ハ南予へ出張中」とある。28日は下痢が続き、静養した。30日から大工を雇い、自宅の部屋の建築を始めている。31日は野菜の種蒔き等をした。

9月、温は実家に居て、家の新部屋建築の監督、農業その他種々用事を行い、また、叢書の校正をした。なお、本月も日中戦争に関する記事が記されている。1日は自宅建築地の地行準備、塀の取り片づけ、果樹の剪定等を行い、2日は航空便で送られた第2巻の校正等をした。3～5日も第2巻の校正等をおこなった。6日は日中戦争で死亡した、故永木古居の遺骨を迎え、慰霊祭に出席した。この日の日記にその状況が記されている。「故、永木古居君ノ遺骨ヲ迎ヘニ七時ノ汽車ニテ高浜ニ行ク。村長以下先ノ汽車ニテ来高、商船会社ノ好意ニテ祭壇ヲ設ケ一同焼香ヲナス。松山連隊ヨリモ出席セラル。八時十分高浜発三津駅ニテハ国防婦人其他ノ送迎アリ、松山駅ニハ古川知事以下市長代理其他有志婦人団整列出迎へ、駅ニテ焼香ヲナシ、石井駅ニハ全村各団体有志出迎へ焼香ヲナシ、宅ニ帰り式壇ヲ設ケ慰霊祭ヲナス。気ノ毒ナルモ名誉ノ極ミナリ」。7日は新部屋の地行の準備を行い、8日に男5人、女8人を雇い、

地行した。9日は第2巻の校正を終了し、速達にて育生社に送付した。10日は日強風雨で地行を休止、11日も暴風雨で、温は猪俣津南雄の『農村問題入門』を読んでいる。そこでの感想は「結論貧弱、学究的一観察ニ過ギズ」であった。12日、故、永木古居の石井村葬が執り行われ、出席した。13日から自宅の新部屋のコンクリート工事を始めている（～17日）。16日に温は猪俣の『農村問題入門』を読了し、次のような感想を記している。「猪俣氏著農業問題入門ヲ読了ス。人口問題ト小経営ノ関係ヲ問題トセザル所ニ見解ノ大差アリ、且ツ対策ハ不可能事ヲ列挙セルニ過ギズ。併シ、農村制度ニ関スル研究并ニ国家的社会的農業観ハ見解ノ如何ハ別問題トシテ一見識ヲ有ス」。17日以降は野菜の手入れや、愛媛県農会報の精読等々をした。なお、20日に温の撰集第2巻『農業政策』が刊行された。28日に下組、中組の全部並びに向組の手伝いを受けて、新築部屋の柱を建てた。29日は庭木の植え替え等。

なお、9月の日中戦争に関する温の記事。2日「本日ヨリ北支事変ヲ支那事変ト呼ブコトニ決ス」、11日「月浦鎮陥落」、12日「馬廠陥落」、14日「上海市政府（支那軍ノ本陣）陥落、北部ニハ大同（河北省）陥落」、17日「大同占領」、18日「河北平原ノ大会戦」、21日「外人ニ明日正午限り南京立退ヲ勧告ス」、22日「徐州占領」、24日「保定占領。敵死傷一万、保定ハ北支軍ノ根拠地」等々。

10月も温は中旬まで愛媛の実家に居て、叢書の校正を行い、また、新部屋建築の監督、農業その他種々用事をおこなった。また、日中戦争の記事も記している。2日は新部屋の屋根準備、3日は瓦を上げ、臨時葺きをした。4日は叢書第3巻『農村時論』の初稿が届き、校正をおこなった。5日は瓦の仮葺き、6、7日は本家の修繕等をおこなった。8日校正が届き、以後校正を行い、12日に育生社に送付した。13日は牛淵の矢木家を訪問し、末光家の負債整理等を協議し、14日は左官を雇い、壁塗り等をおこなった。14日に校正が届き、15日校正を行い、16日に送付した。17日夜に校正が届き、18日校正を行い、石橋幸雄に送付した。19～23日は左官、大工にて屋根葺きを行い、終

了した。

10月23日、温は午後7時高浜発くれない丸にて上京の途についた。翌24日神戸につき、午前8時50分発急行に乗り、東京に向かい、午後7時45分東京に着し、帰宅した。

10月25日は帝農事務所にて帝農評議員会があり、特別議員として出席した。

10月26日から29日までの4日間、帝農は第29回帝農通常総会を事務所にて開催した。帝国農会議員、特別議員が出席し、温も特別議員として出席した。農林省側から井野農林次官、小浜農務局長、村上馬政局長官、重政農政課長、陸軍省より安達少佐らが臨席し、帝農側から酒井会長、山田副会長、渡邊幹事長、東浦幹事らが出席した。26日、各種議案の提案、農林大臣の諮問事項「事変下に於ける農業生産力維持に関する対策如何」の説明等がなされ、委員付託とされた。27日、午前は陸軍新聞班の某少佐、午後高橋陸郎による日支事変の現状についての講演があった。28日は委員会に出席し、温は農林大臣諮問案の委員となり、帝農にて予め作成せる答申案を整理改造した。29日午前9時より諮問委員会を開き、最後の協議をした。11時総会を開き、農林大臣諮問に対する答申、決議、予算の承認、諸建議、等を議決した。決議は「支那事変の拡大に伴ひ農村の責務倍々重大を加ふ。吾人は茲に農会の使命に則り戮力協心農業報国の赤誠を致し、以て時艱の克服に邁進せむことを期す」であった。また、農林大臣諮問に対する答申の要点は、事変下農業生産力の維持増進のために農業経営の保全と農家経営の安定を主眼とすべきであり、事変の進行に伴い、農業労働力が軍事或いは時局産業へ動員、移動され、また、生産手段の不円滑、農業金融の梗塞など農業経営に障害をもたらしており、その対策が喫緊の課題である。さらに、その応急的処置のみならず、根本的施策として農地制度の確立、農業保険制度の拡充、税制改革の断行が必要である、というもので、温の考えが反映されていた<sup>26)</sup> 午後は3班に分かれ、総理以下関係大臣、各政党を訪問し、決議事項を陳情した。

10月30日、温は叢書第3巻の初稿の最後の校正を終え、育生社に送付した。そして、この日、東浦幹事と午餐をした。その際、東浦幹事より渡邊幹事長への不満を聞いている。「東浦幹事ト霞関茶寮ニテ午餐ヲナス…。同君ノ述懐ヲ聴ク。渡邊幹事長ニ慊焉タルモノアルガ如シ」。

なお、10月の日中戦争に関する温の記事。3日「徳州占領」、10日「石家莊陥落」、15日「綏遠帰化城占領、晋北政権成立（大同）、晋北十三県自治政府」、21日「難攻不落ノ娘子関占領」等々。

11月、温は東京に居て、叢書の校正や原稿の執筆等種々用をなした。また、日中戦争が激化し、その記事もよく記している。1日は午後1時より農相官邸にて開催の日本学農聯盟理事会に出席、2日は土屋参事に対し時局対策につき進言し、後、前幹事の福田美知を帝大病院に見舞った。3日は第3巻の校正と題字『農村時論』を送付。4、5日は「村より観たる事変」の執筆、6日は午後2時から帝農職員の熱海行きの運動会に参加し、伊豆山温泉相撲屋に投宿、7日は東浦、千葉君らと箱根めぐりをし、午後6時過ぎ東京に着した。8、9日は「村より観たる事変」を執筆等をおこなった。10日に温の叢書第3巻『農村時論』が刊行された。11～15日は「村より観たる事変」を執筆等、16～18日は農機具協会依頼の「事変態勢下に於ける農村対策」を執筆等をした。19日は帝農は農政委員会を開き、出席した。20、21日は「事変態勢下に於ける農村対策」「村より観たる事変」を執筆等をした。23日は明治神宮における新穀感謝祭に参列、24、26日は「日露戦争当時ノ戦時農業督励」（『帝国農会報』第28巻第1号、昭和13年1月号の原稿）を執筆、また、26日午後6時より東京ステーションホテルにて東京高等農林学校長松岡氏の招待会に出席、27～30日は「村より観たる事変」を執筆等した。

11月、日中戦争はさらに激化した。温は中国都市の占領等に関する記事が多数記している。3日「忻口鎮陥落」、4日「関城鎮占領、彰徳占領」、8日「太

---

26) 『帝国農会報』第27巻第12号、昭和12年12月、159～165頁。

原ノ一角占領」, 9日「太原陥落。上海包圍成ル」, 「事変以来八十九日日ニ上海包圍全ク成ル」, 11日「上海南市包圍攻撃, 南翔駅占領」, 12日「南翔陥落」, 13日「嘉定占領」, 14日「蔣介石洛陽落ノ説アリ。太倉占領」, 15日「昆山占領。無産党転向」「社会大衆党第六回大会ニ於テ綱領ヲ改正シ, 社会民衆主義ヲ棄テ, 民族主義, 国民主義を標榜シ, 反資本主義ヲ資本主義是正ト改ム」, 16日「南京政府遷都ヲ決意ス」, 「支那国民政府ハ大本營及軍事機関ハ南京ニ残り(蔣共), 司法, 立法, 行政, 考試, 監察ノ五院及実業, 教育, 鉄道ノ三部ハ重慶(四川)へ, 外交, 財政, 内政ノ三部ハ漢口へ, 交通ハ長沙へ移転」, 20日「宮中ニ大本營設置, 蘇州城陥落(十九日)」, 25日「防共協定一周年祝賀」, 「防共協定一周年国民大式典ヲ小石川後楽園ニテ開催, 各学校学生八万余参列。夜ハ提灯行列」, 29日「江陰砲台占領」, 30日「広徳占領」等々。

12月, 温は原稿を執筆したり, 種々所用をなした。また, 本月南京占領の記事も記されている。1, 2日は「日露戦争当時ノ戦時農業督励」の原稿を執筆し, 草了した。3日は午前10時より農林大臣官邸にて開催の, 昭和12年産米の米穀格差委員会に出席, 午後は大日本農会に行き, 農会史資料を調査, 4日も大日本農会に行き, 資料調査等, 5, 6日は帝国農会史編纂に着手した。9, 10日は「事変態勢下に於ける農業経営」(『帝国農会報』第28巻第2号, 昭和13年2月号の原稿)の執筆等を行い, 11日は午後2時より広徳寺にて母校の追悼会に出席した。12, 13日は白木屋, 三越にて買物等をし, 14日は温の母上の米寿記念の揮毫依頼をおこなった。15日は農林省に行き, 農産課の森課長と事変の農産物および農用材料供給問題について意見を交換し, 16日は「事変態勢下に於ける農業経営」の執筆等をし, 17日は正午より中金ビルにて開催の中央農林協議会の会合に出席した。18~20日は「事変態勢下に於ける農業経営」の執筆等をした。21日は西村丹治郎氏の病氣見舞い等をし, 22日は白木屋にて買物等をした。なお, この日, 日本無産党, 旧労農派の幹部(山川均, 加藤勘十, 大森義太郎ら)約400名が去る15日検挙されたる記事が解禁となったが(第1次人民戦線事件), 禎子の友人(平林たい子等)が検挙

されており、心配している。23日は西村丹治郎氏の告別式に参列、25日は愛媛への帰国の準備等をした。

12月26日、温は午後9時東京発にて帰国の途につき、翌27日新居浜に立ち寄り、綾子母子に面会し、午後5時50分松山に着し、帰宅した。帰郷中、日中戦争の傷病兵と同行した。「永津部隊ノ傷病兵士ノ帰松一行ト汽車船共同行。右手ヲ切断セル青年将侯ラシキガ元氣ニ話シ居タルモ憐レ。国光、村上両代議士同乗。愛媛県ニ入り各駅傷兵ヘノ慰問アリ。西条ノ入山工兵大尉遺骨帰ル。高橋初次郎君等付添ヒ」。28日は家の煤払い、29、30日は出松し、買物等を行い、31日迎年の準備をした。

この12月、日本軍は上海から南京に進撃した。日記に南京占領に至る記事が記されている。3日「丹陽占領」、4日「句容占領」、7日「南京陥落」「南京ハ何等抵抗ヲナサズシテ潰走シ、我軍城門外ニ待機。入城式ハ両三日」、10日「南京陥落。過半城門占領」、13日「南京完全占領」。そして、この日に南京大虐殺事件を引き起こしている。また、その前日の12日、南京で、日本海軍機が誤って米艦パネー号を撃沈し、陸軍は英艦レディバード号等を砲撃するという事件を引き起こした。温は14日の日記に「米軍艦ネバー号ヲ誤ツテ撃沈シ外交問題ヲ起ス。又、英国艦船ヲ爆撃シ、同時ニ英米両国ニ問題ヲ起サセシハ遺憾」と記している。23日「杭州占領」、27日「済南占領」等々。

## 第2節 講農会のことなど

温は講農会長を続けている。3月15日に東京府農会事務所にて講農会主催の同窓座談会を開き、石原、片山ら10数人が会合し、寄宿舎生活の懐旧談等をした。19日には講農会幹事会を開き、交友会館建設に関する件等を協議した。22日には交友会幹事会に出席し、交友会館、大久保公記念館建設等を協議し、6月22日にも同幹事会で大久保記念会館建設の協議等をした。12月11日には講農会は午後2時より広徳寺にて恒例の追悼会を営んだ。



### 第3節 家族のことなど

家族関係では、愛媛県温泉郡石井村の実家には、母・ヨシと妻・イワが住んでいた。

本年、温の長男・慎吾（大正元年8月23日生まれ、24歳、長野県農会技手）の結婚話が進んでいた。1月5日、温はイワとともに福岡亀一（伊予郡南山崎村大平、農業、収入役、助役、村会議員、郡会議員等歴任）夫婦とその娘・清美嬢と会い、会食した。温は好印象をもった。「清美嬢ハ体格良ク健康相〔様〕ニテ気品モ普通以上。言語明晰ニテ感ジ良キ子ナリシ」。24日に温は昨年より痔治療のため上京していた慎吾と結婚問題について話しあった。また、31日にイワから手紙が来て、清美嬢は女学校教師で良好とのことであった。そこで、慎吾も「意稍決セルモノノ如シ」であった。2月2日、温は慎吾と熟議の上、清美嬢との結婚の話を具体的に申し込むようイワに手紙を出した。その後、温は慎吾に愛媛県農会への転任を勧めたが、2月21日、慎吾から不賛成の返信が返って来た。そこで、温は23日に慎吾に帰国、転勤勧誘の手紙を出した。26日、慎吾は不承不承ながら転勤を承諾した。28日、イワより福岡家に結婚の申し込みをおこなったとの手紙を受け取った。3月3日には、愛媛県農会幹事の多田隆から慎吾受け入れの通知を受け取った。5日、慎吾が出京し、翌6日、温は慎吾とともに、道府県農会長協議会のために東京に出張していた岡本馬太郎愛媛県農会長に青山館にて会い、正式に慎吾の愛媛県農会入りの承諾を得た。7日に温は慎吾と転任問題、結婚問題について協議し、後、慎吾は長野県に帰っていった。総選挙で愛媛県に居た温は、5月1日、慎吾の結婚問題のために、福岡亀一宅を訪問した。福岡夫妻は結婚成立を希望しているようであったが、娘が当人に面会もせずに話は勧め難いとのことであった。この日の日記に「唐人町仁壽生命ノ永沢氏訪問。結婚問題ニ付懇談ノ上、同君ト共ニ大平ノ福岡氏宅ヲ訪問。亀一氏夫妻ト懇談…。両親ノ意向ハ成立ヲ希望セルコトヲ想像セラレ、娘ノ意志ハ当人ニ面会モセザルニ話ハ進メ難シトノ意志ノ如キコトヲ確メタルヲ以テ、徐ロニ兩人会合ノ機会ヲツクルコトヲ約シテ辞

ス」とある。8, 10日に温は慎吾に帰任の督促をした。20日, 漸く慎吾が帰国した。温は午前9時高浜に迎えに行き, 永沢氏に連絡した。永沢氏はこの日, 福岡家を訪問した。21日, 永沢氏が来宅し, 福岡家の清美嬢の情報を伝えた。それによると, 清美嬢はこの縁談に乗り気ではなかった。この日の日記に「永澤君来宅(今朝慎吾ト打合セ, 二時頃訪問スル予定ナリシニ)。昨夜福岡訪問ノ結果ヲモタラシ来宅セラル。(不相変当人ノ意向定ラズ両親ノ切望ニ従ハザル由ニテ, 福岡両親ノ希望ハ尚コノマ、ニナシ置キ本人ヲ勸メ, 其上諒解セザレバ止ムヲ得ズトノ意志ヲ伝ヘテ呉レトノ趣キ。当方ノ親心モ同意志ナル旨ヲ述ベ, 当分此マ、放置シ本人ノ自覚ヲ待ツコト、セント永沢氏ニ話シ置キタリ)」とある。結局は, この縁談は打ち切りとなった。

長女の清香(明治28年3月21日生まれ, 41歳)は, 前年, 長男の権一郎の東京高等農林入学に伴い, 東京に出て, 温の妹・ケイ宅に同居していた。なお, ケイは赤城下で塾を経営している。清香とケイとの間ではしばしば問題が発生していたようである。6月8日「けい子対清香ノ問題ニ付, 清香ヲ論ス」等。

次女の禎子(明治35年2月2日生まれ, 34歳)は劇作家活動を続けている。

4女の綾子(明治41年10月1日生まれ, 28歳)は新居浜にいて, 小野基道とともに, 子供を育てている。